

Index

#001	出世の街 浜松 日本を発展させた偉人たちの 「やらまいか精神」に触れる	p.1
#002	[お天気雑記帳] 日本書紀	p.9
#003	PC 建協定時総会 特別講演 「社会資本整備と共助の役割」	p.10
#004	PC のニューフェイスたち	p.17
#005	PC ニュース ～北から南から～	p.46

今、夢中になっているのは、大河ドラマ『おんな城主直虎』。戦国時代に女性の城主がいたことを初めて知った。井伊家の男が戦死や殺害で次々と亡くなり、存続の危機に立たされて城主になることを決意。井伊家や領地に暮らす人たちを守り続けた直虎の生き方は、簡単にできることではないし、同じ女性として強く惹かれる。

直虎が生涯を過ごした井伊谷は、大國に囲まれた小国だったが、彼女が養母となり育てた井伊直政は、徳川四天王の一人として活躍し、幕末の大老・直弼へと家系は続いた。直虎は、井伊家発展のきっかけをつ

くった重要な人物だ。

井伊谷は、現在の静岡県浜松市の北西部にある。浜松について調べてみると徳川家康、近代では山葉寅楠や河合小市、本田宗一郎、鈴木道雄をはじめとする偉人のゆかりの地で、楽器やオートバイ、自動車、光電子産業などの世界的なブランドを生み出した「出世の街」として注目されている。東京と大阪の中間地点で交通の要だったことはもちろん、浜松にはチャレンジ精神を象徴する「やらまいか」という風土が根づいているそう。それは、どんなものか。現地を訪れて、その精神に触れてみたくなった。



▲ 野面積みの石垣
浜松城の石垣は、自然石を積み上げる野面積みという工法で造られた。石の大きさや形はバラバラで不安定に見えるが、戦国時代に手がけたものが、そのまま残っている。



◀ 浜松城
徳川家康が1570年に築城。17年間、浜松城を拠点に天下統一への道を切り拓いていった。後に城主になった諸大名が、入城後に幕府の要職についたことが「出世城」と呼ばれる所以。

謹んで豪雨災害のお見舞いを申し上げます。

「平成29年7月九州北部豪雨」により甚大な被害を受けられた皆さまに対して、心よりお見舞い申し上げますとともに1日も早い復興をお祈り申し上げます。



表紙のイラスト／都田川橋
「出世の街浜松」で訪れた、新東名高速道路の山岳にかかる都田川橋をイラストとして描いたものです。

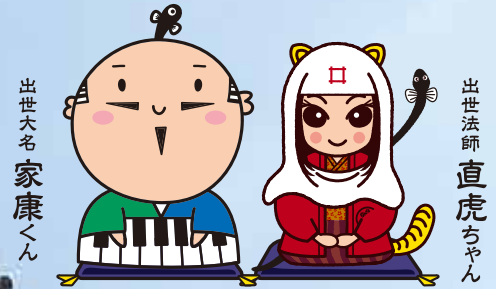
広報誌の名称について

「**PC** Prestressed Concrete 情報誌 **プレス**」は、
コンクリート(C)にプレストレス(P)の力が
作用した様子を表現したもので、
「プレス」は定期刊行物を意味しております。



浜松

日本を発展させた偉人たちの「やらまいか精神」に触れる



©浜松市



織機から自動車メーカーへ スズキの挑戦の軌跡をたどる

浜松駅の構内には、クラシック音楽が流れていた。うなぎや自動車、バイク、楽器などの大きな看板広告が目を楽しませ、浜松餃子やうなぎの名店も建ち並ぶ。新幹線の改札から広がる真っ白なコンコースには、スズキやカワイ等のショールームがあり、ピカピカの自動車やピアノが展示されていた。至るところに浜松を感じ、私の旅行気分はぐっと高まる。駅の近くのレンタカーショップでスズキ車を借りたとき、最初の行き先を決めた。

スズキ歴史館は、本社に隣接された3階建ての建物。入口すぐの階段の天井には、幅2メートルの布が天蓋のように張られ、最上階まで続く。3階まで登りつめると、そこには古



▲ **スズキ歴史館**
1909年、織機メーカーとして創業したスズキのこれまでの歴史や技術の進化を紹介した歴史館。自動車の開発から製造までの流れが実物大で展示されているコーナーは見ごたえあり。

い織機があり、「ガチャン、ガチャン」という大きな音が聞こえてきた。このフロアには、約100年前に織機メーカーとして創業したスズキの今日までの歴史が「プロジェクトX」風のドキュメンタリー映像と当時の製品を中心に紹介されている。

浜松は江戸後期から遠州織物が盛んだった地域。スズキの創業者である鈴木道雄は、織物職人の悩みや苦労を聞き、試行錯誤をしながら、日本で初めて格子柄が自動で織れる鈴木式織機を完成させた。その技術を活かしてバイク、自動車づくりに挑戦。特に日本初の軽自動車『スズライト』を開発したときは、大きな壁に何度もぶち当たった。諦めかけていた社員に当時の社長は「これからは必ず、自動車の時代が来る」と背中を押したストーリーには胸が熱くなった。年代モノの貴重な製品の中で目を



▲ **浜松市楽器博物館**
楽器と音楽を通じて世界の人たちの価値観や美意識、暮らしを紹介。館内には、身近なものから貴重なものまで世界各国の楽器を展示し、ヘッドホンで音色を聞くこともできる。

惹いたのは、1956年にバンコクからパリまでの32カ国4万7000キロを2年間で走り続けたポロポロの実車バイク。いつの時代も「お客様のために価値ある製品を」をテーマに、何があっても諦めることなく挑んできた数々のドラマに夢中になっていた。

国内初の楽器博物館で 世界中の音楽文化を楽しく体験

外の空気が吸いたくなったので、潮風を浴びに弁天島海浜公園へと車を走らせた。弁天島海浜公園は浜名湖が太平洋（遠州灘）につながる今切口と呼ばれる場所にある。昔は湖の入口が閉じていたが、室町時代の大地震で陸が切れ、外海とつながった。現在では今切口に浜名大橋が架かり、目の前の湖上には赤い大鳥居が



◀ **浜松餃子**
キャベツと豚肉の具材をモチモチの薄皮で包んだ餃子は、あっさりとしたジュシーな味わいでいくつでも食べられる。もやしが入っているのが特徴。

▼ **浜名大橋**
浜名湖の今切口に架かる5径間有ヒンジラーメン箱桁橋。国道1号線・浜名バイパスの馬郡IC—新居弁天IC間にあり、橋長は631.8m。周辺は海水浴と潮干狩りが人気の観光地で、赤い大鳥居は絶景のファーストポイントとして有名。1976年完成。





▲ アクトタワー

ハーモニカをモチーフにしたタワーは、浜松のランドマーク的存在。浜松駅前に位置する45階建ての高層ビルには、楽器博物館や商業施設、ホテルなどがあり、最上階の展望回廊から市内を一望できる。



▲ 本田宗一郎ものづくり伝承館

国の登録有形文化財である旧二俣町役場を改装して2010年にオープン。本田宗一郎の軌跡をたどる年譜をはじめ、写真や映像、関係者の談話のほか、遺品や初期のバイクなどを展示している。

建つ。地元の人に「鳥居の真ん中に夕日が沈む絶景のパワースポット」と聞き、ぜひ見たかったが、夕方まで時間があるので断念。浜松駅近くのアクトタワーにある『浜松市楽器博物館』へ足を運ぶことにした。

同館は、楽器産業のメッカ・浜松にちなんで建てられた日本初の公立楽器博物館。楽器の代表メーカーであるヤマハの創業者・山葉寅楠は、出張先の浜松の小学校でオルガンの修理を頼まれたことをきっかけに初の国産品を手がけ、1900年には第一号のピアノを製造。このとき、ピアノの心臓部であるアクションを担当した河合小市が、後に独立してカワイを設立した。当時、山葉寅楠がつくったオルガンの実物のほか、世界中の1300点もの楽器が展示され、見ているだけで楽しくなる。

モノづくりに一生を捧げた
本田宗一郎の少年時代に触れる

日本の近代産業の歴史を語るなかで、忘れてはならないのが本田宗一郎。彼についても知りたいと思ひ、生まれ育った地へと向かった。

本田宗一郎は、浜松市の北部、天竜川が流れる自然豊かな天竜（現在の天竜区山東）で育った。この地に建てられた『本田宗一郎ものづくり伝承館』を訪れると少年時代のエピソードをはじめ、人となりやモノづくりの精神に触れることができる。

勉強は苦手、遊びといたずらに熱中。子どものころから手先が器用で機械いじりが大好き。当時、珍しかった自動車が村に来ると夢中になって追いかけ、飛行機ショーが開催されると聞けば無断で学校を休

み、20キロ先の会場まで自転車で駆けつけた。少年時代からの夢をかなえ、モノづくりに一生を捧げてきた宗一郎。その45年以上の歴史が刻まれていたのが彼の手だ。館内の入口に展示された大きな黒板には、「私の手が語る」というテーマで左手の絵が描かれ、カッターで切ったり、ハンマーで叩いた無数のキズについて紹介されていた。満足な機械がない時代から自動車の修理をはじめ、いろんなものをつくってきた手。「夢中になって仕事をしていると自分の手など見ていないのだ」という彼のメッセージが心に残った。

多くの偉人たちの生きざまや功績に触れて感動した余韻に浸りながら、本日の宿へ。浜名湖畔にある館山寺温泉でゆつくりと温泉に入り、明日の計画を練った。





▼大草山から望む浜名湖

浜名湖周辺のパノラマ眺望が楽しめる大草山の山頂は、天気がよければ富士山を望むことができる。人の手の形にも見える浜名湖の入り組んだ湖岸線がよくわかる。

出世城と呼ばれる浜松城で
ユニークな家康の伝説を知る

翌朝、最初に訪れたのは、かんざんじろープウェイ。浜名湖を中心に浜松の街をパノラマで一望できる大草山展望台から、これから向かう浜松城、直虎ゆかりの地・井伊谷を見つけると、わくわくしてきた。

家康が岡崎から浜松へと拠点を移したのは1570年。最初は今川領だった引馬城を居城としたが、「馬を曳く(退く)」は縁起が悪いため、この地にあった荘園の名前を取り、「浜松城」として築城。29歳から45歳までの間、本拠地として過ごした後、天下統一を果たした。それから25代の城主が誕生し、幕府の要職についたことから出世城と呼ばれる。

浜松城は、浜松の中心部に位置する10haの広大な浜松城公園内にそびえる。美しい新緑のトンネルを歩いて

▼バス停「銭取」

銭取という地名はないが、バス停の名前で残り、近くには「銭取まんじゅう跡」という碑が建てられている。ちなみに小豆餅は1丁目から4丁目まであり、「小豆餅」という銘菓をつくる和菓子店がある。



▲浜名湖うなぎ

浜名湖は日本で初めてうなぎを養殖した発祥の地。今では市内に100店舗以上のうなぎ店がある。炭火の香りとふんわりとした食感、旨みが凝縮された秘伝のタレは絶品。



▲うなぎバイファクトリー

成型から焼き上げ、包装までうなぎパイの製造工程を見学できる。併設されたカフェや売店には、ここでしか食べられないスイーツも。

いくと天守門が見えてきた。天守閣はもちろんのこと、自然石を積み上げた野面積みの石垣が当時の状態のまま残っている城は、全国的にも珍しいそう。早速、天守閣に登り、展望室から街並みを眺めてみる。家康は、眼下に広がる景色をどんな想いで眺めていたのだろうか。

浜松城のパンフレットに、家康生涯最大の敗戦と言われる三方ヶ原の合戦(1572年)での面白いエピソードが書かれていた。武田軍に敗れて逃げ帰る途中、茶屋を見つけて小豆餅を食べていたところ、武田勢がやってきた。逃げ出した家康を店の老婆が走って追いつき、代金を受け取ったそう。この場所を「銭取」と呼び、茶屋のあった場所には「小豆餅」という地名が今でも残されている。実際に車で向かってみるとカーナビが「小豆餅1丁目です」「小豆餅2丁目です」とアナウンス。〇〇ショップ小豆餅店」という店の

看板を見つかるたびに笑ってしまふ。

ちなみに家康は、敗戦して憔悴した姿を肖像画に残し、自分の慢心の戒めとして常に持ち歩いたそう。三河の小大名家に生まれ、幼少時代は今川氏の人質となり、苦労を重ねた家康。自分には厳しい一方「家臣は宝」と言い、信頼関係を築きながら着実に地盤を固めてきた人物像を私なりに感じた。

昼に炭火でじっくりと焼き上げた浜名湖うなぎを味わってから、うなぎパイファクトリーへ。館内に入った瞬間からバターと甘い香りに包まれて幸せ気分! 2階に上がると職人さんが手仕事でパイをつくる工程全体を見下ろすことができた。ちなみに、うなぎパイの表面に塗られるタレは、隠し味にガリリックを使用しているが、工場内でも数人しか知らない秘伝のレシピなのだそう。さて、お腹も満足したので、直虎ゆかりの井伊谷へと向かうことにした。



▲ 龍潭寺
直虎が修行をした井伊家の菩提寺は、奈良時代に行基によって開創された。建物内には貴重な文化財が多数所蔵され、井伊家を知るうえで欠かせない古寺。四季折々の美しい景色を魅せてくれる国指定名勝の庭園は、本堂から眺めることができる。



▲ 井伊共保公出生の井戸
龍潭寺山門の南に位置する井伊家発祥の井戸。その傍らに橘の木が生えていたことから「橘」を家紋とし、「井」を旗布の紋とした。

戦国時代を強く生き抜いた直虎 その功績を子どもたちに受け継ぐ

浜名湖の北側にある井伊谷（浜松市北区引佐町）は、山々に囲まれた盆地にのどかな田園風景が広がる。澄んだ青空には鳥のさえずりが響く、静かで心地いい場所だ。

1000年にも及ぶ井伊家の歴史は、初代・共保ともやすから始まった。彼には井戸で出生したという不思議な伝説が残るが、正直信じがたいと思っていた。けれども現地に足を運んでみると、田んぼの中にポツンと出現する井戸の周りには、立派な白壁と門が築かれ、地域の人たちに大切に守

られてきたことがよくわかる。ここから歩いてすぐの場所にある龍潭寺は、平安時代から井伊家の菩提寺となり、桶狭間の戦いで亡くなった井伊直盛（直虎の父）の戒名から寺号を龍潭寺に変えたそう。直虎は出家し、第二代住職の南溪和尚に「次郎法師」の名を与えられて修行

をした、大河ドラマではお馴染みの舞台だ。

山門を進み、仁王門をくぐると大きな屋根に「井」の家紋がついた本堂がそびえる。周囲には稲荷堂や開山堂などが点在し、想像以上にスケールが大きい。特に庭園が素晴らしいことに驚いたが、これは江戸初期に小堀遠州が手がけたそう。

境内には、南溪和尚の位牌や肖像画、直虎と生前に結ばれることになった許婚いいなまけの直親の墓が並ぶ井伊家墓所など、直虎の生きた時代を随所に感ずることが出来る。身近な人たちが次々と命を落とし、出家の身でありながら城主という道を選んだ直虎。幼少の直政を後見人として養育し、15歳のときに家康と引き合わせた先見性と判断力。そして、自分よりも周囲の人たちを大切に想い、どんな窮地においても井伊家や井伊谷の人たちを守り通した強い女性の姿が、私の中で鮮明になっていった。

直虎ブームの影響で、平日にも関わらず、多くの観光客で賑わう。なかには地元の小学生在が校外学習の一貫として訪れ、「このお寺は、いつ建てられたんですか」と元氣いっぱい質問をしていた。こうやって直虎を受け継がれていくと思うと嬉しくなった。



▲秋葉山本宮秋葉神社
秋葉山を神体山と仰ぎ、709年に創建された神社は、火防の神様として有名。交通網が整備された明治時代には、山頂の参籠者が一晩に400人になったことも。現在の本殿は1986年の再建。流れ造りの本殿と入母屋造りの拝殿を幣殿で繋ぐ権現造りで建坪は130坪。

◀秋葉山山頂からの風景
標高 866 メートルの秋葉山の山頂に建つ秋葉神社。黄金色の「幸福の鳥居」の先に広がる景色は、まさに絶景。遠く離れた遠州灘まで見渡すことができる。

秋葉原の地名の由来になった 天空のパワースポット神社へ

「浜松には、東京・秋葉原の地名の由来にもなっている天空のパワースポットがある」。旅に出かける前に知人から聞いた情報を頼りに、最後に足を延ばしてみた。

『火事と喧嘩は江戸の華』と言われるほど、江戸の街には火事が多発。1869年にも大火があり、明治天皇はその焼け野原（現在のJR秋葉原駅付近）を火除地とし、鎮火社を設けた。人々はその鎮火社を火防の神として有名な秋葉山信仰の秋葉大権現が祀られていると思いい、鎮火社を「秋葉さん」、火除地を「秋葉つ原」と呼んだのが由来になっているそう。浜松の秋葉神社は、全国400社を超える秋葉神社の本宮。足利尊氏や武田信玄、豊臣秀吉などの名立たる武将が一族の繁栄を願って刀を奉納している。

天竜川に沿って走る国道152号線を北上すると、標識に神社の上社と下社のルート案内があった。「行くなら上社かな」と思い、途中から林道をひたすら登っていく。「本当にこの道で大丈夫？」と不安になるくらい細くうねった道は、カーナビ

の地図にも表示されていない。それでも「神社まであと〇キロ」の標識に勇気づけられ、ようやくたどり着いた。後に宮司さんから、山頂にある上社から歩いて2時間ほど下った場所に下社があると教えてもらった。下社は後から建立され、高齢者や足が不自由な方がそこで上社に向かって拝むそうだ。

神社に到着して車のドアを開けるとひんやりとした澄んだ空気に包まれた。大きな鳥居をくぐり、秋葉杉が立ち並ぶ山道の階段をひたすら登って、登って十数分。標高866メートルの山頂に建てられた黄金に輝く「幸せの鳥居」と本殿が目に見え、眼下に広がる景色は、まさに下界。大きな達成感と同時に体の前からパワーがみなぎる。さらに本殿の前に置かれていた巨大な火打ち石をカチカチ叩き、ご利益を願った。

チャレンジ精神に共感する 仲間たちと偉業を成し遂げた

浜松駅へと戻る帰り道、天竜川に架かる壮大な橋を見つけた。

この新天竜川橋は、新東名高速道路の遠州森町PAと浜松浜北IC間に

▼新天竜川橋
新東名高速道路の遠州森町PA～浜松浜北IC間の天竜川に架かる23径間連続箱桁橋。橋長は1585.5m、連続桁長は1584.7m。



▼天竜川

長野県から愛知県、静岡県を南流して遠州灘(太平洋)に注ぐ川。特に浜松市の上流は、のどかな風光明媚な景色が広がり、釣りを楽しむ人を多く見かけた。



あり、橋長は1500メートルを超える。間近で見たくなり、橋の下の原っぱに車を停めて橋脚まで歩いて行くと、このルートを毎日散歩する地元の人と出会った。そのおじさんは「この橋が完成したときに見学会に参加して、橋の中を歩いたよ。車が走る道路の下は空洞になつていて広がった」と嬉しそうに話してくれた。橋は交通インフラの役割を担うだけでなく、地域のランドマークとして親しまれ、次世代へ受け継がれるものだと感じた。

目の前に流れる天竜川を見ながら、今回の旅を振り返ってみる。浜松の偉人たちは、考えて悩むよりも行動しようという「やらまいか精神」に溢れた人物だということがよく理解できた。根底にあるのは、地域の人たちを幸せにしたい、役に立ちたいという強い想い。その情熱が周囲を引き込んで輪を広げていった。どんな偉人でも一人では何もできない。前人未到の偉業を成し遂げられたのは、彼らに共感する多くの仲間がいたからだと思う。

世の中は目まぐるしく進化し、豊かで便利になった。何不自由なく生活ができる一方で、大切なものが薄れているような気がした。



出世の街 浜松 旅MAP



大平高架橋



浜北高架橋



都田川橋



東ノ谷池橋

秋葉山本宮
秋葉神社上社 (p.06)

秋葉山本宮
秋葉神社下社

本田宗一郎
ものづくり伝承館 (p.03)

天竜二俣駅
転車台と扇形車庫

新天竜川橋 (p.06)



はまゆう大橋



とびうお大橋

